



3月28日(日)環境サポートセンター(札幌市)に於いて、「第6回総会」が開催され、参加者による、活発な意見交換が行われました。

発
行

北海道食の自給ネットワーク

札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内

TEL(090)2818-5502 FAX(011)789-8890

ホームページアドレス <http://kirari.com/wm/jk-Site/>

E-mail:moto@wordm.com

トリインフルエンザの教訓

農場「たつか一む」代表 高野 律雄

私たちの養鶏場に、今年もまたおしどりツバメが飛来し、作業舎の軒下に、子育てのための巣作りを始めました。木々の梢ではホトトギスが鳴き交わし、遠くカッコウの鳴き声も響きます。鶏舎周りの草地はタンポポの花の黄色いジュータン。山のコブシ、サクラも満開、春真つ盛りです。しかし、この冬、私たち自然養鶏家は、このような野鳥たちの飛来、春の訪れに大きな不安を抱いていたのでした。

― 発生と経過 ―

一月十二日、山口県の養鶏場で七九年ぶりに、強い病原性をもつトリインフルエンザが発生しました。その後、大分県、京都府でも発生が確認され、そこでの養鶏業者の不適切な対処が原因で兵庫県、香川県にも飛び火し、また、広くアジアでのまん延が報道され、

大きな社会問題に発展してしまいました。さらに報道を過熱化させたのは、この高病原性トリインフルエンザが、エボラ出血熱、新型肺炎（SARS）のような野生動物やペット、家畜などからヒトにうつる可能性のある「動物由来感染症」、なかでも近年深刻化している牛海綿状脳症（BSE）、サルモネラ症と同じ「家畜由来伝染病」の一種だったためです。そして一九一八年、皮肉にも歴史上初の世界大戦のさなか、戦争という負のグローバルな人的交流によって、世界中で大流行した「スペイン風邪」では、戦死者の一、〇〇〇万人を大きく超える二、〇〇〇万人から四、〇〇〇万人が死亡しました。その後も、百万人以上が死亡した一九五七年の「アジア風邪」、一九九七年の「ホンコン風邪」等、二十世紀に出現し、ヒトの間で大流行した伝染病が、実は、すべてトリを由来とした新型インフルエンザ（A型インフルエンザ）であったことが判明したのは、一九七〇年代に入ってからでした。そして、WHO（世界保健機構）を中心とした各国の研

究の結果、一九九五年の段階でA型に属する未知の超インフルエンザ・ウイルスは「数年以内に出現し」、第一次世界大戦当時とは比較にならないグローバルな人的・物的交流が日常的になされている現在、ひとたび流行し始めれば「最低でも全人口の二十五%が発症」（全世界で約十五億人）との見解が示され、これを受けて一九九七年に、厚生省から出された「新型インフルエンザ対策報告書」では、「これまでのウイルスとは、遺伝子構造がまったく違い、トリがかかるインフルエンザの遺伝子を持っている未知のインフルエンザX（仮称）が大流行する可能性があり、大量の死者が発生、パニックが起こることも予測される」と明記されたのでした。そして、実にこの年、九十九年間の英国の租借期限が切れ、中国の特別行政区になるお祭り騒ぎに沸き立っていた香港でニワトリの大量死が発生し、それはヒトにも感染して十八人の患者の内、三十%の六人が死亡しました。この原因のウイルスが、今回日本に上陸したH5N1トリインフルエンザ・

ウイルスだったのです。この時は、香港政府が迅速な対応をとり、香港中のニワトリを殺処分して終息しましたが、昨年五月、再びニワトリが大量に死に、ここでも香港政府は百二十万羽を処分してヒトへの被害を阻止しました。しかし、それ以降、ニュースとしては、同時期にエマージング(突如出現する)ウイルスとして流行したSARSの過熱報道に隠れるようにして、このH5N1ウイルスは世界に拡散し、複数の死者を出してしまいました。そして、ついに日本で発生。こんな出来事を、マスコミが見過ごすはずはなかったのです。

― 発生のメカニズム ―

それでは、この世界を騒がし、脅威をあたえるA型インフルエンザ・ウイルスとはいったいどんな生き物なのでしょう。それはわずかなタンパク質が、その合成に関わる八本のRNA遺伝子を覆っただけの極微の生物で、外から栄養を取り込んでエネルギーを合成することも出来ないし、分裂して子孫を作ること出来ません。もともとウイルスは、太古からヒトを含む

ほ乳動物と鳥類が保有していましたが、鳥類のカモのみが、すべての動物に対する感染の由来となっています。そしておそらくウイルスはカモの誕生の時から、その生息地であるシベリア・カナダなどの北極圏の湖沼でカモの糞のたい積の中で生存し続け、毎年、カモの冬の渡りの間に世界中の生き物に拡散していったのでしょうか。ウイルスにとつてカモなどの野鳥は住み慣れた我が家です。また野鳥の方も、遠い昔からの淘汰・摂理の中で免疫システムを獲得し、発症することはありません。

自然界では絶妙なバランスで共存していたのです。しかし、この「低病原性トリインフルエンザ」が、ニワトリ・アヒル・七面鳥等の、人工的に飼育されることによつて自然界の免疫システムを失ってしまった家禽(カキン、家畜化した鳥類全般)に感染し、さらに、その家禽の飼育状況が悪く抵抗力が弱かった場合、本来入り込めないはずの遺伝子のレセプターに無理やり侵入してウイルスの型の変異をはじめ、そこが密集した環境だった場合、その変異

が加速度的に繰り返され、およそ六ヶ月後に、ハイリスキの「高病原性トリインフルエンザ」に変容します。天空を飛び回る野生のトリに比べ、世界中の大規模養鶏の主流となっている「ウインドレス(窓のない)鶏舎」の中で、生まれたときから親鶏からの免疫抗体を、エサに混ぜられた抗生物質で失い、生涯お日様に浴することもなく、羽ばたくことすらできず、その上過密、栄養過多など大きなストレス環境におかれている家禽は、本来生体に備わっているはずの免疫力が著しく低下しています。また、徹底した消毒や、ワクチン、殺菌・殺虫剤など薬剤漬けの、耐性菌を生み出す環境が体内でのウイルスの変異を急激に促進し、世界的な厄災になってしまいました。本来、渡り鳥の糞便などから直接ニワトリが発病することはなく、私たちの心配は全くの杞憂だったのです。

かつて中国の南部には、おびただしい水トリたちが冬の間営巣していました。しかし沿海部の著しい経済成長を支えるための乱開発によつて豊かな田

園が失われ、水トリたちの生活圏が縮小した結果、少なくなつた水場に膨大な数のウイルスが集中し、遺伝子の交換の頻度が高まつたところに大規模な養鶏場が次々と建ち、危険な遺伝子の変容が起こつたものと考えられます。

人為的な自然生態系の破壊が引き金になつたのです。そこで感染したニワトリは香港に搬入され、今回の世界的な大流行を引き起こしてしまいました。

なお、日本に上陸したウイルスは、香港から何らかの経路で移動したH5N1ウイルスが、昨年の十二月に韓国南部の養鶏場で発症し、そこで感染したカササギ(カラス科の留鳥)が折からの強風に乗つて飛来し、その死がいを日本のカラスが食べて感染しまつたのか、あるいは感染した物質をヒトがフェリーで運んだのかは定かではありませんが、たまたまその経路上にあつた養鶏場を汚染してしまつたのでしょうか。しかし、「たまたま」は偶然ではありません。昨年、日本からの日本の卵の価格は戦後一下落し、特に大手の養鶏業者は危機感を募らせていました。そこで多

くの養鶏場では、普段は産卵後一年で淘汰してしまふニワトリを「強制換羽」(産卵鶏は毎年一回、普通は秋に羽が生え替わり、その間は卵を産まなくなりまふ。そこで一定期間エサも水も与えないという大きなストレスを与えることにより短期間の休産期で済ませ、もう一年産卵させることによつて、その分のトリ代を浮かせる技術。しかしこの弱つた期間に発病しやすいので危険)にかけたり、卵の賞味期限のねつ造さえもおこなひました。発生したふたつの養鶏場でも共に「強制換羽」をかけた直後のトリから発症しました。そして、どちらの養鶏場も、太陽、大気、大地から完全に遮断された「ウインドレス鶏舎」でした。

—今後とるべき道—

私たちは今、たいへん大きな選択を迫られています。科学物質をひたすら多用し、人工的な環境に作物・家畜を囲ひ込んで効率・収益性のみを追求する近代農業・畜産を容認することで、なにひとつ安心して食することが出来なくなり、なおかつ次々と出現する新しい病気に怯えて生きていくのか。それとも自然の豊

饒性・多様性、その治癒力を信じて、おおらかに身を任せるのか。今回の、起こるべくして起きた事件は、そのことを切実に突きつめました。私たち有機農業者、自然養鶏家は、もちろんこれまで以上に自信を持つて、私たちに与えられた、自然に即した農業に邁進していきます。ネットワークのみなさん、どうぞ力強いご支持と連帯をお願いいたします。

(多数の文献から勝手に引用させていただきました。著者・文献名を明記しなかつたことをお詫びいたします)

高野 律雄氏プロフィール

一九五三年七月四日 静岡県清水市生まれ
一九七八年 明治大学文学部(心理学専攻)卒業

一九七九年 国立秩父学園付属養成所終了
同年、社会福祉法人「嬉泉子ども生活研究所」にてセラピストとして勤務。
一九八七年 障害をもつ者もたない者の農場「たつかーむ」を開設。

現在、十四名の仲間達とともに、自然養鶏・有機農業を実践中。
北海道有機農業協同組合 理事。

リレートーク

「コピーライター？ そんな資本主義の手先みたいな仕事をして、恥ずかしくないのか」。

私がこの仕事をはじめた二十数年前。界隈では、先輩たちがこのような言われ方をしていた。私は、学生運動世代でもなければ、資本主義という言葉が日常会話に出てくるような毎日を通じているわけでもなかった。しかし、この言葉に、「金になればなんでもやるような、モラルのないヤツラの子飼いだろ、おまえたちは」という挑発と蔑みがあることくらいは、感じ取れた。

十年位前にもなるうか。あるチヨコレート会社の仕事を担当した。新製品をどう広告するかというプロジェクトだった。ある日、打合せの席に、そのチヨコレート会社の社長が登場した。話を聞いているうちに、私は、何かおかしいなと感じ始めていた。「こうしたほうが儲かる」「これくらいの手間しかかけていないけれど、これくらい価格を上げたってわかりやしない」社長のひとつひとつの説明の裏に、そんな本心がチラチラ透けて見える気がしたからだ。

しばらくして、私はハーンと思った。この社長は、チヨコレートをポルトやナットと同じものと考えているんだ。確かに、チヨコレートもポルトも、鋳型にはめて工場で生産するものだもんなあ。でも、待てよ。片方は口に入るものだよ

売るほうの食育

有限会社 オブジェクティブ
コピーライター 佐々木 葉子

ねえ。私の胸の中に、「何か気持ち悪い」という感触が広がった。それまで出会ってきたシエフや生産者は、誰もが食べ物というものにロマンと責任を持っていた。食べ物を買う仕事をする人はそういうものだと思っていた。それが、さらりと、しかし、いとも簡単にガラガラと崩された。ショックだった。

「三歳までに食べた味は記憶から消えない。だから、三歳までにうちのハンバーガーを食べさせるのだ」そう言って、子供に向けたコマージュナルを大量に投下した社長がいた。ある飲料メーカーも同じ発想で、ターゲットを幼児へと引き下げた。コマージュナルは子ども向けに作られているが、肝心の食べ物自体は子ども向けに作られているのか。「いやいや、そんなことより、売ればいいのだ」ということか。確かに、ビジネスセオリーでは、売れば勝ち組だろう。でも、子どもの味覚や健康、将来への配慮も重要だろう。

「食育」というと、食そのものの、食の生産方法、食生活、食のマナーなどを想像するが、食の「売り方」もテーマのひとつに取り上げていいのではないか。「広告をどう作ろうと、買うのは消費者の自己責任」などと高をくくってはほしくない。広告を作るほうには作るほうで、プロなのである。相応のノウハウと戦術をもって、知らないうちに買うように促せなければ、プロではない。さすがにいまは「資本主義の手先」という言葉は聞かない。しかし、あの言葉は広告の仕事をする人間にとって、心の踏み絵としていつも抱いていないといけない箴言でもある。

「共に囲む食卓」

長沼町 農場「メノ・ビレッジ」経営 エップ・レイモンド

先日ある方からお手紙をいただきました。私たちの育てる野菜やたまごを何年も食べてくださっていましたが、転勤で地方に引越された方からでした。その中には、「お店に買いたい物に行ったらけれど、何を見ても安心して食べたいと思うことができなかった」と書かれていました。狂牛病や鶏インフルエンザ、偽装問題など、食に関する問題がニュースにならない日はありません。かつて私たちは、これほど「食べる」ことに、不安を感じたことがあったでしょうか。

「スーパーへ行ったら、安い中国産の有機野菜と、もう少し高くて有機ではない道産の野菜が売られていました。どちらを買ったらいいんでしょう」という質問を受けたこともあります。農業や遺伝子組み換え作物など、目に見えないものへの不安から、「国産」「有機」という表示だけでは、消費者は安心できなくなっています。

人の命を支えるはずの食べ物、安心して手に入れることが、なぜこんなに難しくなってしまったのでしょうか。政府の責任でしょうか？ 農業や遺伝子組み換え技術を研究している人たちのせいでしょうか？ 農家が、そういうものを育てるのがいけないのでしょうか？ 消費者が賢い選択をしていないからでしょうか？

昨年六月のある晴れた日、私は札幌の豊平区にある北海道農業研究センターを訪ねました。そこで試験栽培されている遺伝子組み換えイネについて知りたいと思ったからです。ひとり

の研究員の方に案内されて行ったその圃場は、一・八メートルの高さのフェンスに囲まれ、入り口には鍵がかけられていました。その上ですべてを覆う形で網がかけられており、二十四時間の監視カメラが二つ取り付けられていました。研究員の方は、ここから花粉が他の稲に飛ぶ可能性はないことなどを話してくださいました。私は、「私たちの農場では、近郊の七十五軒の家庭に届けるため、三十五種類の野菜、米、小麦、大豆、鶏卵を育てています。人々は安心して食べられるものを求めており、私たちも食べる人たちの健康を支えることを目的に作物を育てています。もしも遺伝子組み換えイネが認められ、私の隣の家が植えたなら、その花粉が飛来し、私の稲と交雑してしまいます。そうなれば、私はもう、みんなに米を食べてもらおうことができなくなってしまうでしょう」と話しました。その方は、「これは、大規模農業を可能にするための技術です。米の国際価格はどんどん下がっており、小規模な農家は年々経営が難しくなっているのです」と言ったり黙ってしまいました。彼が何を考えていたのか、はつきりしたことは私にはわかりません。でも実際に、この技術によつて経営が成り立たなくなるであろう、小規模の農家を目の前にし、言葉も失ってしまったようでした。この技術の恐ろしさは、植えたくない人の畑にも遺伝子操作された種子や花粉が飛んで行って、作物や畑を汚染してしまうことです。自分だけが作りたくない、食べたくないと言っているだけでは、この危険から逃れることはできないのです。

日本の政府は、昨年だけでも五千億円という巨額のお金を、遺伝子組み換え技術の研究につき込んでいます。政府も研究者も、七、八割の消費者が要らないと言っている食品をなぜ進んで研究、開発しようとするのでしょうか。新しい技術の

発展は私たちに効率のよさと便利さをもたらしてくれれます。また、その研究と開発の過程で、国は経済発展を遂げることが出来ます。しかしその技術が、私たちの社会、つまり人と人、人とあらゆる命のつながりに対してどのような影響を与えるかというのを、為政者たちは、きちんと見据えているのでしょうか。政治の目的は、理想とする社会を創りあげることであり、技術や経済の発展ではないはずで。

アメリカの一般的な農家に育った私は、自分自身、父と大規模農業を営みながら、なぜ農業が大規模化していくのかを理解してきました。それは、土も作物も時には自然条件をも人間が管理し、コントロールしていく農業です。農家は巨大な機械に乗り込み、一日中、土に触れることもなく農作業をこなします。そのような考えの下では、農業も遺伝子組み換え技術も「必要」なものとなります。私の義兄は「遺伝子組み換え技術を使えば、どんな怠け者でも雑草のない、きれいな畑が作れる」と言つて、この技術を歓迎しています。

一方、日本の伝統的な農業と出会う中で、私は、農業に対して全く違った考え方があることを知りました。ここに、F・H・キングというアメリカの土壌学者の書いた「東亜四千年間の農民」という本があります。この博士は、今から九十年以上前に、土地の養分を使い尽くすアメリカの農業の未来を危惧し、四千年間も土を豊かに保ちながら農業を営み続けている日本と中国、韓国へ来て、この本をまとめました。彼はこれらの国々の農民を、尊敬をこめて「国の守り人」と呼んでいます。彼らは土と作物を思いやり、慈しみ、そのための重労働も厭いません。自然は搾取する対象であり、重労働は克服されるべき問題と見下されてきた西洋の農業観とは、全く異なる、土づくりの

農業と、そのための労働を価値あるものとして支える文化がそこに描かれています。しかし、このような素晴らしい日本の伝統的な農業が今、死に絶えようとしています。一軒の農家がどんなにがんばっても、この伝統を引き継ぐことはできません。それを支える人々のつながり（コミュニティ）と、それを価値あるものと認める文化が必要なのです。

農村と都市の協力なくしては、土の健康が守られ、農家は育てた作物に対する正当な報酬を受け、消費者は季節に合った安全な食べ物を得る仕組みを創り上げることができません。共に目的を持って協力するとき、つながりが強められ、本当の意味で人々が安心して暮らすことのできる社会が創られるのだと思います。冒頭で述べた、食をとりまく様々な問題は、誰か特定の人が生み出したのではなく、それぞれ立場の人々が、思いを通わせ共に協力する場が、社会の中にないことが原因だと思えます。私たちの命は、私たちがつかみとったのではなく、与えられたものです。土地からの収穫も、私たちの農場を支える人々からの支援も、食卓に集まり共に食べ物に分かち合うことができるのも、土を慈しみ、人々の健康を願った結果として与えられるものだと思います。全ての人が大切にされるような、新しい社会を、食べ物に分かち合う食卓に例えることができます。そこには、科学者や政治家たちの座る席もあるでしょう。共に食卓を囲む人々に、私たちは何を差し出しますか。どんな技術を研究するのか、どんな農業を選ぶのか、どんな政治でそれを支えればいいのか、そこから見えてくるのではないのでしょうか。これが、私の希望、私の夢です。この食卓の実現のために、私も自分の役目を果たしていきたいと思えます。

大豆プロジェクト

二〇〇四年活動方針

プロジェクトリーダー 五十嵐 美由紀

二〇〇〇年から始めた大豆トラストは、昨年九十名の参加で二二二口（四二四kg）となり、初めて二〇〇口の大台を超え、地味ではありますが、着実に運動の輪が広がっています。当初から生産者としてかかわって来た江別市の松下博樹氏ですが、大豆作付け品種の変更にともない、空知郡北村で水稻、小麦、大豆等を生産している渡辺信一郎氏にバトンタッチすることになりました。大豆の品種も、トヨムスメからツルムスメに変わりますが、少し大粒で品質的には勝るとも劣らない、自信をもってお勧めできる大豆です。

また、小麦トラストとの連携をはかり、大豆を使った製品開発や、お互いのトラスト参加者への情報提供等を行いながら、新たな気持ちで五年目の大豆トラストに取り組みたいと、メンバー一同（五十嵐、鈴木、上野、清水、秋山）はりきっています。

小麦プロジェクト

プロジェクトリーダー 米田 香

二〇〇二年よりスタートした小麦トラストは、今年で三年目を迎えます。二〇〇三年度の小麦トラスト参加者は一四四名（一四四口）で、少しずつではありますが、トラストの輪は着実に広まっています。今年三月に行った意見交換会には、生産者、消費者、加工業者、行政合わせて三十二名が集まりました。作り手と食べ手、それぞれお互いの想いを語るこ

よって、「顔の見える」関係を築くことができました。そして、地場農産物の「作り支え・食べ支え」というトラストの概念を、今後もしっかりと継続していこうという意識もさらに高まりました。

今年度は、相互の信頼関係をより深めるとともに、トラスト参加者の拡大を目標に活動していきたいと思えます。七月の産地見学交流ツアーは美唄市を訪問します。小麦畑での刈り取り体験の他、美唄の水田で広く実施されている「かおりの畦道」見学や美唄農業に関する話を聞いたり、食事をしながら生産者やJA、行政の方々と意見交換を行います。様々な体験や交流ができる楽しいツアーにしたいと考えていますので、ぜひご参加下さい。さらには十一月には、北海道大学の留学生とともに様々な国の小麦料理を作って食べ、交流を図ろうという「お国自慢・小麦料理交流会」の新企画も予定しています。スタッフも楽しみにしながら計画を立てています。こうした活動を通して、より多くの人が参加しやすい場をつくり、「顔の見える」トラスト運動を展開していきます。会員のみなさんのご参加をお待ちしています。

■年間計画

四月 会員募集

五月 参加申込者へお知らせ發送

六月 ファームレターの発行

七月 産地見学交流ツアー

八月 ファームレターの発行

十月 パンづくり講習会

十一月 お国自慢小麦料理交流会

十二月～三月 トラスト製品發送、通信の発行

三月 意見交換会

食育プロジェクト

「食育講座」の準備にあたって

プロジェクトリーダー 松本 啓 佑

今年度から装い新たに再出発した食育プロジェクトは、「食と農」の結びつきを強めるという観点から、私たちの食生活や食環境を見直すための家庭・学校・地域のネットワークづくりや、食育の実践に取り組んでいきます。最初に取り組む活動は、子どもたちを対象にした「食育講座」の開講です。

「食育講座」は、来年度から札幌市内および近郊の小学校五・六年生を対象に、年八回のコース（月一回の開講）の中で、調理実習や生産地見学、学習などを行う事業です。

この事業の目的は、子どもたちの豊かな心と食生活を育み、農業や環境に対する理解を深めることです。内容は大きく分けて、①自ら食と健康について学び、考える力と、調理などの技能を身につける、②旬の素材を調理して食べることにより、本物の味を知る、③土や動植物などに触れる体験を通して生態系や環境について学び、「食と農」の関係や「食べる」ことの意味を考える、というように、幅広いテーマを取り上げる予定です。

そのため、会場も調理実習室から農場、小売店舗など多岐にわたりますが、これは調理方法や技術を身につけるとともに、素材の持つ特性や栄養、農産物・食品が作られる過程について、生産・流通の現場で直接学ぶことで、体験を通して食と農に対する関心を高めることができるメリットがあるといえます。今年度は、会場選定、予算編成、募集方法など運営に関わる準備が主な活動となりますが、当

面は具体的なカリキュラムの作成と同時に、八月九月までを目途に会場

視察や講師の選定および打ち合わせを行っていきます。十・十一月にはそれぞれ一回ずつの試験実施を行い、そこでの成果と反省点をもとに実施体制を煮詰め、来年度の初めには受講生の募集を開始し、二〇〇五年六月の開講を目指します。

ふれあい学習広場「ふれんど」

二〇〇四年度活動計画

ふれんどリーダー 大湊 寿隆

二〇〇四年度の「ふれんど」は、「土に触れ・人とふれあう」をテーマに体験を通し、知識や情報を同世代に向け発信していく事を目標に今年度は活動していきます。

△会員交流会の企画・運営▽ 五月から会員交流会運営委員会を立ち上げ、多くの人が参加し易い会員交流会の開催を目指します。

△体験学習▽ 農業小学校への参加を今年も継続して行っていきます。さらに農作業ボランティアなどを通して本格的な農作業を体験し、農業というものをより身近に体感し、昨年度も行った産地見学や、内部学習会を開きメンバーが相互に学びあっている環境にしていきます。

新たに自給ネットの活動やフォーラムの紹介などの宣伝・広報活動を強化します。また会員の様子を「ふれんど新聞」に掲載し取材を通して会員の紹介をしていきます。発行は年四回の「空とぶてんと虫」に同封発送します。

△ホームページ▽ 今年度は自給ネットHPのコンテンツの「ふれんど」の部分を管理、更新していきます。当面は我々の活動をHPにおいて紹介し、将来的にはHPが自給ネット

の広告母体となるべく情報発信していきます。

プロジェクトからの報告

二〇〇二年から二年間、札幌市郊外の丘珠で親子体験農園を取り組み、食農育に力を注いできた会員・土肥さんの設立までの経緯と子供たちの姿を紹介いたします。

親子体験農園からの収穫

NPO法人 札幌村文化センター(事務局) 札幌市東区伏古

代表 土肥 信子

当会は、地域文庫を母体とした婦人学級が、郷土史を学ぶ「札幌村歴史研究会」として二十数年前に発足しました。研究会では、幕末に掘った運河の発掘調査を行い、その成果を東区役所から「大友掘」として出版しました。されました。その後、十一人の玉ねぎ農家から聞き取りを行った「北のたまねぎ札幌黄を育てた人たち」を出版してきました。これらの郷土誌を出版したことで、東区の小学校から玉ねぎの総合学習に登壇を依頼されるようになりました。

古来からの聴き取りを行う中で郷土の歴史は、農業の歴史であると確証し、子供たちに稲の体験学習を計画する為、専門的助言の協力を道立中央農業試験場稲作部に願い出しました。その結果、親子で稲を多角的に学ぶ講座を実現する事ができました。お米を炊き、藁ごうりを編み、給手紙用の筆を藁で作るなど親子で体験することができました。

地域での活動が、広がったのを機に学習だけではなく、人々の交流の場を目指した、札幌村文化センターとしてNPOを取得し再出発を計りました。NPO取得をしたことで地元の丘珠郵便局の支援を得ることができ、「郷土の歴史と農業」の講座を開講しました。この時のご縁で、農園の提供を申し出られたのが、丘珠の北島英司氏でした。しかし、組織の中



からは、素人の会員だけの営農は、無理だと意見が二分し、苦慮しましたが、市の農業指導センターの協力体制を得ることができ、開園にこぎつけました。

最初の年は、八組の親子でスタートしました。トウモロコシ、馬鈴薯、枝豆を播き、野菜を育てるのが初めての子供たちは、驚きを様々な表現(言葉と絵)で伝えます。

小学一年生の男の子は、種蒔きをした日から丘珠の天気が気がかりになったり、作物の発芽に驚き、芽の生長を全身で表現していました。じゃがいもの花は、下からさわるとふかふかしているそうです。小学二年生の女の子は、初秋の肌寒い日にさざげ摘みをした後で、畑の土の上に掌を押しつけ「土って温かいよ」とつぶやきました。食の自給ネットの小麦トラストで、石狩中部農業普及センターの渡辺さんに出会い、お陰さまで小麦の生産者交流ツアーと同じコースの体験をファームの子供たちと体験させてもらいました。道産小麦「春よ恋」の播種から鎌での刈取り、千歯とモーターでの脱穀、石臼引きと…。一連の体験をする子供たちの瞳の輝きには、感動せずにはいられません。

多勢の人々のご支援で実現した農園。野菜を育てた体験は子供たちの心に消えない思い出として残ったことでしょう。

農業に全くの素人運営の本会に残された課題は多く、参加者の手を煩わせることもありました。運営を経験し、体験農園は、現役の農家主体であるべきだと、実感しました。

近年、食育の重要性が論じられていますが、これまでの経緯からも農育を車輪の片方に加えてほしいと願っています。そして、都市近郊での体験農園が、今後さらに増加することを願っています。

会員からの

メッセージ

「海と山が仲良くなれば…」

札幌市北区 榎本 真澄

食べる事に好奇心の強かった私は、子育てが一段落した現在も、講演や行事があるとお話を聴きに出かけている。

転勤族の我が家は子育ての時期に海流の違う港町室蘭、留萌、紋別で数年過ごせたのは秘かな自慢であったが、気弱な子供たちには、土地や環境が変わる負担は大きかった。早く環境に馴染む為にも、私の食べることへの関心は大いに役に立った。親同志の交流会で料理や身内、友人からの贈り物を交換しながら、その品物の背景にそれぞれの思い出が詰まっていることも知った。

そうなる親しみが湧き、食への関心も無限大となる。人のつながりも増え、畑にも山にも海にも連れて行ってもらった。交流が深まる中で口に入るものがどれ程の距離を移動し、部品化され薬にも毒にもなるかを語れる仲間も増えてきた。食の関心が高まる今、生産姿勢の見える表示を鳥瞰図のように総合的に見る努力を、消費者はするべきだ

と思う。近年トレーサビリティ、表示義務と現場の動きは喜ばしいと思う。本来農業とは、作物の生長を見届けられる唯一の職業でありながら、その生業で発生する経営の厳しさを知り、力の限界とジレンマを感じ私は、農家の疲弊に同情を禁じ得ない。

食べることは、まさに小宇宙。島国日本には、濃厚な味を持つ魚介類が育つ海と、山(大地)が育てる風味豊かな作物たちがある。このお互いの味を融合させ、その旨味を生かしていくと、食べ物はおもしろく楽しくなると思っている。

「遙かなる縄文からのメッセージ」

札幌市西区 宮原 正幸

先日、秋田県にある縄文遺跡「大湯環状列石」を訪ねて来ました。約四千年前の日本最大規模のストーンサークルにただ圧倒されました。縄文人は一体どんな願いをここに託したのでしょうか？殆どは、石英閃緑ひん岩と呼ばれる緑の石で4km以上も離れた川から数世代に渡って、約六千個もの石を運び続けた縄文人の想いは、専門家でも「謎」との事でした。

北国に住む私たちにとっても長い冬が終わり、一斉に植物が芽吹く春は希望の季節です。当時も大地を埋め尽くす

す縁に「今年も生き残れた！」という越冬の歓びの色、生命の再生を確信させる色だったのではないだろうか。春を待つ心と自然界の恵みへの感謝の心が縄文人をして大作業を成し遂げさせたのではないかと、緑の石を前に考えた私の結論でした。

縄文時代には、既に食料の栽培が行われていました。豊かな土壌は人間に多くの緑の恵みを与え続けてくれたのです。自然とともに生きた縄文人の農業こそ、間違いなく「無農薬・有機栽培」の原点でしょう。水・空気そして土を破壊し、汚染し続けてきた人類に縄文人のDNAが「安心なもの・自然な生き方」を要求しているように思えてなりません。自然とともに生きた縄文人の智慧に学ぶことです。

秋田から戻り、壮瞥町の農場「たつかーむ」を見学させて頂き、代表の高野さんの生き様に感銘を受けました。案内して頂いた農場の風景に何故か幼い頃の懐かしい風景を思い出しました。鶏が自然に生きることのできる環境こそ人間を健康に生かさせてくれるように思います。

「食」と言う字は人を良くすると書くのです。会の中で心豊かに生きる為の力を育てていける食のあり方について、考えていきたいと思えます。

… 事務局～お知らせ …

● 自給ネット会員交流会のお知らせと募集 ●

日 時：2004年9月18日(土) 現地集合・現地解散

時 間：10時～終日(時間内出入り自由)

場 所：ふれあい体験農園みたむら 〒069-1211北海道夕張郡由仁町岩内1614

手品、楽器演奏、歌、詩吟、落語、踊り等々の特技・かくし芸をお持ちの方、交流会で披露してみませんか？上手・下手は問いません。どうぞふるってご参加下さい。お待ちしております。

問い合わせ先：事務局 090-2879-2170

● 会費納入及び各トラスト参加のお知らせ ●

2004年度会費(個人会費2,000円)(団体会費10,000円)の振込みをお願いします。

2003年度会費未納の方も合わせて郵便振替にて至急納入願います。

先にご案内しましたとおり、本年度も大豆と小麦の二つのトラスト運動を行います。ファームレター、農業情報などの通信のほか、生産地見学交流ツアー、それぞれの製品を利用した料理講習会なども企画しています。

自給ネット会員のみなさんの積極的参加をお待ちしています。

大豆トラスト：生豆1口 (2kg) 1,500円 道内宅配(希望者)500円
味噌加工(出来上り味噌8kg・送料込)5,500円

小麦トラスト：12月～3月の4ヶ月間。毎月江別・美唄産小麦の製品(パン、ラーメン、うどん、ピザ生地、小麦粉、菓子類)を詰め合わせ小麦通信と一緒に宅配します。
参加費；(製品・農業情報・通信・送料込み) 12,000円(道外の場合は別途差額を頂きます)

振込先：郵便振替 02700-1-47533 振込口座名：北海道食の自給ネットワーク

参加費、会費を同時に振り込む場合は摘要欄にご明記ください。

上記 問い合わせ先：090-2879-2170

編 集 後 記

季節の移り変わりの中で、季節ごとの仕事をしている農業者をうらやましく思う。特に春はそれを強く感じる。

これから種まき、という時の彼らは希望に満ちていて、機嫌が良く皆いいやつだ。そんな彼らを見て僕は春を感じたりしている。

それは他の季節も同じ。季節感の少ない街の暮らしの中で、農業者が季節を運んでくれる。

夏の彼らは忙しい。収穫に草取り、おまけに配達。多品種栽培が多い農業者はその管理も大変。

どこに何を植えたのかわからなくなったりもしている。忙しくなるとピリピリとしてくるので付き合いいは気をつけなければ。

秋。元気があるかないかで、その年の出来が見通せる。

良かったにしろ、悪かったにしろ冬にはまた、来年の野菜作りに闘志を燃やしている。そんな一年を過ごす農業者は、まさに季節そのものだ。

今年はどうな年になるだろう。元気な秋を伝えてくれるだろうか。